

書評

## 岩城けいの世界を読む

『ジャパン・トリップ』（角川書店，2017），『<sup>マット</sup>Matt』（集英社，2018）

川上 郁雄\*

© 2020. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

### 1. 『ジャパン・トリップ』

岩城けい氏のこの作品は2017年に単行本として発表された。その後，2020年に文庫版が出版された。文庫版の帯には，「「半分日本人ってなんだよ，それ？」日本人の母を持つオーストラリアの小学生・ショーン，7日間のニッポン大冒険！」と書いてある<sup>1</sup>。

この文庫版で「解説」を書いている北村浩子氏はこの作品について，次のように紹介する。

この『ジャパン・トリップ』は，メルボルンの小中一貫校，ローランド・ベイ・グラマー・スクールに通う子どもたちが，日本と日本語を体験する物語だ。

（「解説」 p.278）

北村氏が「日本と日本語を体験する物語」とまとめるのは，彼女が「ライター，日本語教師」という職業と経験があるからであろう。

この物語は，この学校の子どもたちが姉妹校協定を結ぶ大阪の<sup>りょうせい</sup>綾青学院を訪問し，ホームステイや京都観光などをする旅程の保護者向け説明会のシーンから始まる。この説明会で引率教員の一人として，その学校で日本語を教えるコータ・ヤマナカが紹介される。そのあと，物語

\* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

1 ここで使用したのは『ジャパン・トリップ』（角川文庫，2020）。ページ数は，この文庫版による。

のセッティングを示す「My トリップ」、日本の旅を詳細に描く「My オカーチャン」「My トモダチ」「My ホームタウン」と展開していく。文庫版には、「I Love You」と「ひとりごと」という二つの掌編もついている。

「解説」を書いている北村氏は、この作品だけではなく、「岩城作品を読むと、いつも「言葉と人」について考えずにはいられなくなる」（「解説」p. 278）と記している。私は北村氏の読み方や意見を否定するものではない。そもそも小説の読み方は人それぞれでいいのである。そのことを踏まえた上で、北村氏の解説を交えながら、私の捉え方を述べてみたい。

## 2. 移動する子どもたち

この物語の二つ目のエピソード「My オカーチャン」は、12歳のショーンが中心である。ショーンが日本でホームステイした宮本家で経験するさまざまな「異文化体験」の事柄が出てくる。ホームステイ先のホストマザー、茉莉と過ごしながら、母親のいない家庭で育ったショーンが自分を育ててくれた祖母（ナン：おばあちゃん）を思い出す。このことを、北村氏は次のように述べる。

ナンへの感謝の気持ちから、ショーンは日本へ来たかった一番の理由を口にはしない。しかしナンは気付いている。気付いていることをショーンは知っている。この、祖母と孫の関係がいとおしくせつない。日本に慣れてきた滞在三日目、「理由」をめぐる葛藤<sup>かつとう</sup>に背中を押され、ショーンは自分でも思いがけないことをしてしまうのだが、抱きしめてくれる茉莉の全身から放たれる優しさに向けて彼が発した言葉が「オカーチャン」であることに胸がしめつけられる。ずっと抱えてきた小さな空洞に、すっぽりと温かく収まる「オカーチャン」。「日本語の」「オカーチャン」であることに、大きな意味があるのだ。（「解説」p. 280）

さらに、北村氏は次のように綴る。

初日の「アリガトウ」は、大阪を離れる日に「アリガトウ、ゴザイマス」になる。ゴザイマス、には三日間分のショーンの気持ちがこめられている。相手の言葉で伝え

ると渡せる気持ちが何倍にもなることを、彼はこの「トリップ」で知ったに違いない。  
（「解説」 p. 281）

ここで北村氏は、2つ目のエピソードで自身が読者として心が動かされた部分を説明している。確かに、多くの読者は川村氏と同じ感動を覚えるであろうし、私も同じように感じた。ただ、北村氏はこれからこの作品を読む人に「タネ明かし」をしないでおこうという配慮があるのか、ショーンの「日本に来たかった一番の理由」について何も言及していない。

オーストラリアの親元から日本にやって来て、ホームシックになった少年が、ホームステイした先のホスト・マザーに自分の母親像を重ね、「オカーチャン」と日本語で呼んだという訳ではない。著者の岩城氏は、ショーンの「日本に来たかった一番の理由」について、次のように丁寧に描いている。

まず、日本に来てから、ホスト校の女子生徒からショーンは「ショーンって、もしかして、まっぷたつ？」と聞かれる。ショーンは実は、オーストラリア人の父と日本人の母のもと、オーストラリアで生まれたのである。だから、ショーンが3歳まで日本語を話していたと、祖母は言う。ところが、ショーンが6歳になった頃には、もう母親はいなかった。母親は突然、子どもを置いて日本に帰ったという。父親はパイロットとして留守がちだったため、ショーンは祖母に育てられた。今回の「ジャパン・トリップ」の話を聞いた時、ショーンは、「胸の中がだんだん、火事みたいに熱く」なった。なぜなら、ショーンの母は今、キョートに住んでいると祖母から聞いていたからである。

しかし、ショーンはすぐに「ジャパン・トリップ」に参加したいとは言い出せない。岩城氏は、ショーンの気持ちを次のように綴る。

「ジャパン・トリップ」に参加したいだなんて、とても言い出せないって思っていた。ジャパン、って聞いただけで、ナンもおれも、たぶん父さんも、胸のやわらかいところがピンで刺されたみたいにピクンってなる。キョートなんて、ピンでピクン、じゃなくて、ナイフでグサリだ。でも、キョートに行けるって聞いたとたん、どうしても行きたくなった。キョートじゃなきゃ、おれは来なかった。  
(p. 92)

ショーンは自分自身についても考える。

おまえは半分日本人だ、って父さんは言うけど、半分日本人ってなんだよ、それ？  
自分だって、半分アイルランド人で半分ドイツ人じゃないか。でも、(中略)おれも、  
オーストラリアに生まれてよかったってマジ思う。おれだって、もちろんオージーだ。  
親がオージーじゃなくても、オーストラリアで生まれて育ったら、みんなオージー  
だ。 (p. 96)

さらに、ショーンの母親について、祖母の思いが記述されている。

ナンはこうも言っていたんだ。一度だけ、あの人がおまえに会いに来たことがある。  
おまえは覚えていないだろうが、おまえは母親に駆け寄って行った。でも、あの人が  
おまえの手をひいて、連れ去ろうとするのを、父さんが追い払ってしまった。たった  
数時間だけでいい、ふたりで過ごさせてほしい、これが最後だから、とあの人は泣い  
ただけどね、おまえの父さんは許さなかった。(中略)海の向こうがどれほど遠いも  
のか。海の向こうに残してきたものが、どれほど大切か、忘れられないか。覚えてい  
るって、つらいこと。忘れてしまいたいと思えば思うほど、思い出したくないことば  
かり思い出して、つらくなってくる。 (p. 99)

ここに、オーストラリア生まれの、学校で日本語を学ぶ子どもが単に「日本語と日本を体験  
する物語」とは言えない何か、あるいは、単なる国際離婚に巻き込まれた子どもの悲話とも言  
えない何かがある。この背景には、ショーンの両親が国境を越えて出会い、一時期共に暮らし、  
そして離別し、再び国境を越えて子どもに再会し、しばらくして今度は子どもが国境を越える  
という「移動」の視点がある。

### 3. 移動とことば

北村氏の「解説」に戻ろう。北村氏は次のエピソード、「My トモダチ」に描かれるハイリー、  
キーラ、シャンテル、ユイカなどショーン以外の子どもたちの出来事を説明しながら、次のよ  
うにまとめる。

キーラとの仲直りを経て、ハイリーは心でユイカにそう語りかける。「すっごく楽しい」のは、話したいという想いと言葉を受け止めてくれる相手がいるから、そして自分も受け止める側になれるから。「トリップ」で九人は、ハイリーが得たようにそれぞれの実感と喜びを手にしたことだろう。帰国時の大きな笑顔がその証拠だ。

(「解説」, pp. 281-282)

確かにこのエピソードに登場する人たちの「実感と喜び」は、北村氏の言う通りだろう。しかし、私には、そのような出来事が起こるセッティングにこそ意味があるように思える。たとえば、大阪にいるユイカはその前年にオーストラリアでハイリーの家ホームステイしている。今度は、ハイリーがユイカの家ホームステイしている。ユイカはハイリーに英語でメールを送るほど、英語が得意だ。ユイカの両親はアメリカ留学中に知り合い、結婚した。だから、娘のユイカには高校留学させ、そのまま海外の大学に進学させたいと思う。英語に興味があるだけのユイカにハイリーは苛立つ。日本語を学びたいと思って日本に来たのに、ユイカが英語ばかり使うので、ハイリーは日本語を使う場面がないのが不満であった。

同様にホスト側のミサキは、前年にオーストラリアへ行った際に、キーラの家ホームステイした。だから、今度、キーラがミサキの家ホームステイすることになって、日本にいるミサキがキーラにスカイプをして来た。二人とも、英語もニホンゴも片言しか話せなかったが、胸がいっぱいになったという。

シャンテルは、フランス人の母とオーストラリア人の父のもと、フランスで生まれた。小さい時、父の国、オーストラリアに移住した。今でも、家では母親とフランス語で話す。クリスマスごとに、フランスに帰り、フランス語を使うので、フランス語を忘れる心配はないという。一方、ハイリーの祖父はオランダ人でオランダ語がペラペラという。孫のハイリーは、英語とニホンゴを話す。次のように思う。

ひとつの言葉ばかりを使っていると、もうひとつはどうしているかなって思う。留守番をしているもうひとつの言葉が気になって仕方なくなる。元気かな、寂しがってないかな、大丈夫かな、って。だって、言葉って使わないとしなびる。ちゃんと世話しないと、元気なくなっちゃう。あんなに特訓してきたけれど、わたしが毎日使うのはやっぱり英語で、ニホンゴには留守番ばかりさせている。だけど、わたし、ニ

ホンゴのこと、絶対に忘れていない。それよりも、ニホンゴの方がわたしのこと忘れちゃわないかなって、心配。 (p. 211)

引率教員の一人、コータ・ヤマナカこと、山中光太郎にとっても、京都は特別な場所だった。光太郎は、瀬戸内海の町から京都の大学へ進学した頃、京都生まれの彼女に会う。大学を出て、会社に就職する。しかし、しばらくして会社を辞め、ワーキングホリデーで渡豪する。そんな光太郎を、半年後に彼女は追いかけて渡豪する。光太郎は、オーストラリアで日本語教師になるために大学に入り、教員免許を取ることを目指す。彼女は、日本食レストランで働いて、生活費を稼ぐ。光太郎が卒業したら、籍を入れる予定だった。しかし、彼女は、「お母ちゃんが倒れはった」という知らせで、帰国した。光太郎も帰国し、説得するも、「たったひとりの女に振り回されるようなあかんたれ、うち、知らんえ」と彼女は去って行った。

#### 4. 「移動とことば」は続く

再び、北村氏の「解説」に戻ろう。北村氏は、この光太郎に触れて、「心を込めて日本語を教えつつ、言葉は万能ではないと認識している人物であることがこの小説に厚みを与えている。」(「解説」 p. 282) と述べている。

そのような見方があってもいいだろう。しかし私は、前節で述べた子どもたちの心情や子どもたちの間に起こるさまざまな出来事が、リアリティを持って構築される仕掛けにこそ、注目したいと思う。それは、「移動とことば」というテーマである。

北村氏は、文庫版に収められた掌編「ひとりごと」で光太郎が口にする安西冬衛の一行詩、「てふてふが一匹韃靼<sup>だつたん</sup>海峡を渡って行った」について、「日本から海を渡り、オーストラリアにやって来て十年。過去の恋を上書きできそうな気配もある。光太郎の「<sup>トリップ</sup>旅」は、これからも続く。」(「解説」 pp. 282-283) と述べている。私は、むしろ、ここに「移動する人々」の歴史のイメージを見る。過去から現在まで、多くの人々が海を渡り、そこで新たな人々に出会い、複数の言語の中で暮らしていたのであろう。その時は、ハイリーが述べたように、自分の中にある「ことば」の混ざり具合についても思ったはずだ。ユイカの両親やシャンテルの両親、ハイリーの家族がそうであったように、「移動とことば」の世界は昔からあり、今も続いているのである。

## 5. 『Matt』<sup>マット</sup>

最後に、『Matt』(2018)を検討してみよう。これは、『Masato』(2014)の続編である。単行本の帯には、次のように紹介されている<sup>2</sup>。

オーストラリアに移住してはや5年。安藤真人は、現地の名門校、ワトソン・カレッジの10年生になっていた。Matt (マット・A)として学校に馴染み、演劇に打ち込み、言語の壁も異文化での混乱も、乗り越えられるように思えた。しかし、同じMattを名乗る転校生、マシュー・ウッドフォード (マット・W) がやってきたことで、真人——マット・A——は、自らの“アイデンティティ”と向き合うことになる。

さらに、

「だったら、なにから自由になれないの？」

人種が、言語が、国が、血縁が、歴史が、17歳の少年の心と体を離さない。オーストラリアに生きる二人のマット。模索する自らのアイデンティティ。

また、「少年たちの心を切り裂き、また、成長へと導くものとは。世界の広さを痛感させる青春小説」とも書かれている。

物語はハイスクールの10年生になった真人の1年間が学期ごとに描かれている。TERM1 (一学期), TERM2 (二学期), TERM3 (三学期), TERM4 (四学期), Summer Holiday (夏期休暇) と続く。

『Matt』(2018)のTERM1 (一学期)は次のシーンから始まる。

「そっち、いま何時？」

六時っておれは答えた。図書館で「ホームワーク・クラブ」に出て宿題をすませて帰ったら、この時間になった。東京は四時のはず。なんでこんな時間にもう家にいる

---

2 本書, pp. 136-144。



んだよって訊くと、今日は昼から講義さぼっちゃった、とか言う。そんなんで大丈夫なのかよ、っておれが口を尖らせると、べつに一、あー、もう二月？ 就活、うざいー、って姉貴は唸った。(p. 8)

『Masato』(2014)では、真人の姉は東京の高校へ通うために帰国した。その姉は今、東京で短大に通っている。母親も東京。オーストラリアには真人と父がいる。つまり、家族が二つに分かれて暮らしている。なので、次のシーンは、こうだ。

前だったら、スカイプしてくるっていったら必ず母さんだった。しょっちゅう、おれに何食べてるの、学校はどう、ちゃんと生活できてるの、とか訊いてきて、父さんも喋ってた。でも最近になって、病院でフルタイムで働いて帰りが遅いし、時差があるし(中略)、こっちとタイミングあわないって言い出した。で、かわりにって言ったらなんだけど、姉貴がときどきスカイプしてくるようになった。(p. 8)

このように家族が日本とオーストラリアで暮らし、テクノロジーで瞬時につながる「モバイル・ライブズ」として描かれ、その中で、登場人物が生き生きと動き出すのである。上の場面は次のようにスカイプ越しに進んでいく。

今夜はなにを作るの、って姉貴が大声出しているのがきこえた。「Omelette」っておれが大声でこたえと、もお、またあ、英語使うんだからー、カンジワルイー、オムレツのことでしょー、ってブツクサ言ってる。カンジワルくて悪かったな、ここでは「Omelette」は「Omelette」なんだよ、そっちこそ、英語をいちいちキモいニホンゴに直すな、一応英文科なんだろ、って言いかけてやめる。言ったってどうせわかりっこない。(p. 11)

父親は会社の海外転勤でオーストラリアに来たのだが、今はその会社を辞めて、自分で中古車を輸入するビジネスを始めていた。しかし、そのビジネスもうまくいかない。夜遅く帰宅して酒を飲む父親と真人の会話がある。



「真人，おまえは英語もうまいし，小学生のころからこっちにいるんだから，不自由ないだろう」とか言う。英語喋れて子どもの頃からこっちにいても，あんたが考えているほどラクじゃねえんだよ。 (p. 13)

著者の岩城氏は，父親の気持ちにも，子どもの気持ちにも寄り添っている。物語はさらに展開する。ハイスクールで，真人は演劇のクラスを受講する。そこで，クイーンズランド州のダーウィンから引っ越して来た転校生，マシュー・ウッドフォードに会う。この Matt・W は真人 (Matt・A) に敵愾心を抱き，「うぜえんだよ，ジャップ！」，「おれのじいさん，ジャップに人生台無しにされたんだ！」と言う。第二次世界大戦で，日本軍がダーウィンを空爆した史実がこの背景にある。

「おまえらジャップはな，だまし討ちみたいな汚ねえやり方で，おれたちの町をメチャメチャにしやがったんだ！ おれのじいさん，いまじゃ，朝メシに何を食べたかも忘れるけどな，おまえらのやったことは未だに全部覚えてるんだ！」 (p. 54)

真人はオーストラリアの歴史を知らなかった。だから，思う。

マット・W のやつ，うるせえんだよ！ あいつのことだから，これ，ぜんぶ，このおれが，やったんだって言いたいんだろ？ たのむからジャップとおれを一緒にしないでくれよ！ おれがやったんじゃない，おれがやったんじゃないぞ！ (p. 59)

## 6. 「移動する人々」の心情

この物語には「移動する人々」の心情が随所に描かれている。東京にいる真人の姉貴がオーストラリアにいる真人に母親の気持ちを言う場面がある。

お母さん，あんたには絶対言わないけど，こっちに帰って来てから，息子をほったらかしにして帰るなんてヒドイ母親だとか，息子にやりたい放題させて甘やかし放題だとか，外国暮らしがあわないなんて，エリート・サラリーマン家庭のくせに贅沢言う

なとか、そのほかにもガマンが足りないとか、自分勝手だとか、母親失格だとか、もう、サンザンだったんだよ。でも、お母さん、なにひとつ言い返さないで、じっとガマンしてたんだよ。

(p. 76)

演劇クラスで出会ったマット・Wについて、真人は思う。

あいつがマットなら、おれもマットだ。あいつが生まれたときからマットなら、おれはこっちに来たときからだ。おれはこっちで、真人からマットに生まれ直したんだ。……これだけはあいつに文句言わせない。ひとつの名前だけでなんでも済んで、ひとつの言葉だけを操って他の言葉に操られたことなんかなくて、ひとつの国、自分の国だけでぬくぬく生きてきたあいつなんかに、これだけは、絶対に文句言わせない。

(pp. 77-78)

オーストラリアに来た時、真人はまだ英語が話せなかったが、もう5年もたってオージーの子どもたちと変わらないほど英語が上達した。だから「どこから来た?」とか「何人(なにじん)」とか絶対に聞かれないという。しかし、父親は違うと真人は思う。

でも、これが父さんになると、たいていは「どこのご出身?」っていきなり訊かれて(初対面の人間にこの質問をいきなりするなんて、デリカシーがなさすぎるとおれは思う)、「日本です」って答えてやっと会話が始まる。「日本です」から始まる会話って、プライベートな話につながる事があんまりない。相手も「シンジ・アンドウ」と喋ってるんじゃなくて、「日本人の代表」と喋ってる。ま、一応、エチケットとして、名前も訊かれるだろうけど、家に帰る頃には、「どこそこで会った日本人、名前忘れたけど」みたいな。

(pp. 85-86)

真人の友人にも、「移動する家族」がいる。たとえば、ロビー。

ロビーは五歳のときに中国人の親に連れられてここに来た。生まれたのは、「山ばっかりの村」だってことだけで、親の国のことはそれしか覚えていない。一人っ子の口

ビーは親から期待されていて、必死に勉強して念願の全額給付生になったっていうのに、親は「ここはのんびりしていて、競争っていうものがないから、一番になってあたりまえ」みたいに言うらしい。本人は将来の夢とかなりたいものなんかない、欲しいものならいっぱいあるけど、って言う。(p. 90)

エレキギターを持って出かけようとするロビーとロビーの父親が中国語で何か言い争う。真人はそれを見て、「ロビーって、中国人なんだ」と気づく。そのあと、ロビーは親との確執を抱いたままエレキのコードで首を吊った。

英語と日本語を使うことに対する真人の思いも描かれている。たとえば、「父さんがおれから視線をそらした。おれが英語を使うと、おれの話の本気で聞く気が失<sup>う</sup>せるらしい」と真人は感じる。代わりに日本語で父親に話すとき、「おれの胸の中で一気に燃え上がる。日本人にトドメ刺すんだったら、日本語に限る」と思う。この一節は、ことばが人と人の関係性と感情に密接に関係していることを示唆する。

真人は父に言う。「一体、ここ、何年住んでいるんだよ？ 五年？ 六年？ いいかげん、お客さんでいるのはやめろよ？ 観光客じゃあるまいし！ 日本人だっていうだけで、おれがどんなに不自由しているか、あんた、知らねえだろ？」と。「おれは、あんたみたいに、好きで日本人やってるんじゃないよ！ おれ、あんたみたいに、なんでもかんでも日本人で済ませたくねえんだよ！」

真人は、自分の「日本国旅券」(JAPAN PASSPORT)をキッチンばさみで切り刻んでしまう。「バラバラになった自分の顔、バラバラになった自分の名前、バラバラになった自分の国籍。おれ、バラバラ、だ。」「なんて自由なんだろう……！」<sup>3</sup>

## 7. 「移動する家族」

物語は、さらに進む。演劇クラスの課題をめぐるオーストラリアの移民の歴史からVCE試験、17歳の誕生日、恋愛に学期最後のディスコなど、生き生きとした青春ドラマが続く。そして、最後の「Summer Holiday (夏期休暇)」の書き出しは、次のシーンから始まる。

3 本書, pp. 136-144。

「そっち、お正月に遊びに行ってもいい？」

十二月に入ってからすぐ、姉貴がスカイプしてきた。(中略)画面のむこうで、姉貴が風呂上がりの濡れた髪をタオルで拭いた。(p. 224)

この物語の冒頭と同じような遠隔の対話場面だが、様子は随分違っている。なぜなら、オーストラリアの真人の家には父親以外に子連れ的女性が住んでいる。それに気づかれないように真人は画面越しに姉と話をする。

「なに？ 誰かいるの？」

いいや、とおれはなるべくふつうに答えた。画面に視線を戻すと、なんでもないふりして話しかけた。

「いいんじゃないの？ 正月にこっち来いよ。母さん、どうすんの？」(中略)

—— 私、家を出ようかと思うの。

—— おれ、寄宿舎に入ることにした。

—— お母さん、ほんとうにひとりぼっちになっちゃうけど。

—— 父さん、おれがいないほうが、いいと思う。

能面のように眉一つ動かさず、こんどはたがいのセリフに、自分の事情を乗せていく。フッフ、アハハ、と、姉貴もおれもこらえきれなくなったように笑い声をあげた。(pp. 225-226)

この後、物語はさらに複雑に展開する。真人の姉は、日本のお正月に真夏のオーストラリアへやってくる。そして父親と真人が住む家に、父親の愛人とその連れ子がともに暮らしている事実を知る。その家で父親は日本からきた娘に言う。「お母さんとは別れる。そうしたかったんだ、もうずっと前から」。それに対して、真人の姉は言う。「お父さんと別れたかったのは、お母さんの方よ！ もうずっとずっと前から！ こっちに来る前から！」

この場面のやりとりは、読者にはつらい。最後に、真人の姉は日本に帰るために空港へ向かう。真人の姉が言う。「お母さんなしで、私、いまさら、どうすればいいのかわかんない。どうしよう、真人」。真人も思う。自分は「もう日本には住めない、日本人の基本なんてとうの昔になくなって、それに、こっちでも、いつまでも、なんだかなあ、みたいな。おれもどうして

いいかわかんねえな・・・」。

ここでも「移動する家族」が「分散家族」(multi-sited family)に帰結することを暗示しているかのようである(川上, 2018b)。

## 8. 「移動する子ども」というフィールド

私は文学研究者ではないので、岩城けい氏のこれらの作品を文学論的に論評することはできない。ただし、「移動する子ども」学の視点から、次の3点を指摘したい。

岩城氏は物語を作っていくとき、人物設定をすると、その人物が勝手に動き出すと述べた<sup>4</sup>。岩城氏自身が25年前からオーストラリアに居住しながら国境を越えて移動したり、東京の出版社と通信したり、家庭の内外で英語と日本語によるコミュニケーションを日常的に体験したりするなど、モバイル・ライブズを生活している。したがって、第一点は、著者はモバイル・ライブズの中で創作活動をしているという点である。

第二点は、物語の軸に、「移動とことば」があるという点である。登場人物が移動しているということと、移動にともない複数言語環境で生活しているということがバイフォーカルな軸として物語世界を貫いているということである。

第三点は、「移動とことば」を特徴とするモバイル・ライブズに生きる人々の思い、葛藤、情念、不安、希望など主観的な意味世界と、人としての生き方とアイデンティティを描いているという点である。

一つだけ例を出そう。『ジャパン・トリップ』のショーンは国際離婚した親を持つ子どもで、真人は海外に住む日本人同士の親が離婚した子どもといった単純な捉え方はできない。むしろ著者が描いているのは、「移動とことば」によって彩られた世界である。著者は、真人の母が、息子と夫を置いて帰国する(帰国せざるを得ない)女性の心情に寄り添い、かつ、息子より劣る英語力でビジネスを起こし心がボロボロになる男性の心情にも寄り添い、その両親の生き方に心が揺れる子どもたちを描いている。

これらの作品群は、モバイル・ライブズを生きる人々の「移動とことば」を軸とした生活世

---

4 2019年12月の「早稲田こども日本語研究会」の対談。

界を描いている。オーストラリアに住む日本人の話とか、オーストラリアから日本にやってきた子どもの話としか見られないのは、論者の視点が一ヶ所に定住化している「天動說的視点」による論評だからである。岩城氏の物語世界は、著者自身がモバイル・ライブズの中で動きながら捉える「地動說的視点」によって「移動する人々のリアリティ」を描いている<sup>5</sup>。だからこそ、単なる「子どもの成長と自立の物語」ではなく、むしろ、今の時代を読み解く貴重な「アカデミックな研究」と言えるのである。

## 文献

岩城けい (2017). 『ジャパン・トリップ』 角川書店 (文庫版, 2020).

岩城けい (2018). 『<sup>マ</sup>tt』 集英社.

川上郁雄 (2018a). なぜ「移動とことば」なのか. 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子 (編) 『移動とことば』 (pp. 1-8) くろしお出版.

川上郁雄 (2018b). モバイル・ライブズを生きる「移動する家族」の物語 —— 岩城けい (2017) 『Masato』 集英社文庫『ジャーナル「移動する子どもたち」 —— ことばの教育を創発する』 9, 40-46. [http://gsjal.jp/childforum/journal\\_09.html](http://gsjal.jp/childforum/journal_09.html)

---

5 「天動說的」および「地動說的」視点と研究については、川上 (2018a) 参照。